

令和6年度の学校評価（自己評価）

前年度の重点目標		将来、テクノロ・バーサタイルistとなりイノベーションを起こす人材を育成するために 1 進学・就職の両立ができる愛知総合工科高校づくり 2 教職員が自ら行動し生徒に寄り添う愛知総合工科高校づくり	
担当	担当の重点目標	具体的方策	評価結果と課題
1 総務部	ア 業務・行事の改善と運営スケジュールの見える化	・業務、行事を見直し、データファイルの整理をする。	・業務分担を一覧にして見える化することで、担当者一人一人が確実に業務を実行することができた。 ・業務の平準化が今後の課題である。
	イ 開校 10 周年記念式典の準備委員会の立ち上げと活動開始	・開校 10 周年記念式典の準備委員会のメンバーを決定し、活動を開始する。	・創立 10 周年記念式典の実行委員会を立ち上げ、日程、会場等を決定することができた。 ・今後、式典の詳細を決定していく。
2 教務部	ア 学習評価の共有と学習活動の改善	・シラバスで明示した、評価の項目・方法を共有し、学習の見通しをもたせ意欲的な学習活動を促す。 ・主体的・対話的で深い学びを実現するため、ICT 機器の活用を促進する。	・シラバスの評価の項目・方法について理解が進み、観点別学習状況の評価から、学習活動の改善につなげることができた。 ・Microsoft Teams のノート機能を活用した意見の発信や、教科の特色に合わせたアプリケーションの利用など、学習方法の改善ができた。
	イ 校務支援システムの積極的な活用	・各教科、毎授業の評価・欠課などを適宜入力できるようにして、担当者間での共有を図る。	・担当者間での情報共有はできていたが、校務支援システムでの評価・欠課入力が各考査での処理を主としているため、利用状況は限定的であった。
3 生徒指導部	ア 挨拶と規範意識の向上 ・校内での挨拶励行 ・遅刻者数の減少	・生活委員会の生徒らと共に、朝や休み時間に挨拶運動を実施する。 ・遅刻数の多い生徒に対して個別に面談を実施し、自身の基本的な生活習慣について考えさせ、改善を図る。	・生徒の挨拶に対する意識が高まった。（生活委員へのアンケート結果：挨拶の重要性を感じた 82%、生徒は挨拶を返してくれるようになった 70%）。 ・遅刻数に変化は見られなかった。今年度より実施した面談で、家庭環境の問題など生徒の悩みを聞くことができ、面談による成果があった。また、必要に応じて、担任・スクールカウンセラーに報告し、連携して指導することができた。
	イ 自転車通学者のヘルメットの着用	・自転車点検の際、生徒にヘルメット着用について改めて周知する。 また、登校時に声掛けをする。	・登校時のヘルメットの着用は当初より高まったように感じる。しかし、自転車を学校に乗り入れない生徒のヘルメットの着用について指導方法を検討する必要がある。
4 生徒会部	ア 生徒の自主性を促す活動の実施	・学校の課題を洗い出し、毎月一度、生徒による活動を実施する。	・各委員長からなる委員長会を実施し、学校の課題やそれぞれの委員会で実施できることを話し合い活動することができた。
	イ 生徒会部、部活動の地域連携	・年度初めに地域貢献活動の計画を立て、計画に沿って地域と連携していく。	・部活動の部長を中心に地域と連携できる内容を検討し、年間を通じて概ね実施することができた。

5 保健部	ア 自発的な学習環境美化意識の涵養 ・日常の清掃活動の充実 ・美化委員会の活動 ・安全点検 イ 健康教育の充実 ・各種検診 ・保健委員会の活動 ・教員の長時間労働による健康障害の防止	・清掃道具の充実を図る。 ・安全点検、用具点検を定期的に実施する。 ・生徒美化委員会の活動を充実させる。 ・奉仕活動 ・個別指導を通して、自己の健康に関心をもたせ、自己管理能力の向上を図る。 ・生徒保健委員会活動を充実させる。 ・定時退校日の案内を徹底する。	・清掃道具を現在精選中である。 ・奉仕活動を実施し、今年度は前年度の2倍の約 240 名の生徒が参加した。 ・検診の終了後、医師と相談し、健康講話 の実施の開催を決めた。 ・生徒保健委員会は大変充実した活動ができた。生徒美化委員会は行事等の関係により前期と後期で若干の偏りができてしまったので、活動を再検討する。 ・定時退校日に対する教員の意識が変わってきたので継続していく。
6 図書部	ア 図書館機能の充実 イ 生徒図書委員会活動の活性化	・地域の公共図書館と連携を図ることにより、本校の図書館機能を拡張する。 ・読書センターとして、生徒の健全な教養を育むための図書を選定し、読書の習慣化を促す。 ・従来の図書委員会活動をさらに充実させるとともに、新たな図書委員会活動を実施する。	・愛知県図書館の協力貸し出しを利用し、本校の蔵書を補えた。今後も地域の図書館との連携を増やしていきたい。 ・本校の蔵書構成で不足している新書や文庫本を多く選定できた。引き続き不足している分野の本を増やしていきたい。 ・本校音楽部と連携し、セタコンサートとクリスマスコンサートを本校図書館で開催した。今後も継続して開催していきたい。
7 進路指導部	ア 企業内学園・技術職（専攻科含む）・公務員合格者 60 名の実現 イ 企業の一次内定率の向上	・Teams 等を使用して情報共有を行い、進路に関する意識を高める。 ・キャリア教育活動等の充実 「夢・志クエスト」を出発点とし、キャリア教育の充実を図る。 ・T&E サポーター企業、連携校から講師を招き、キャリア教育に基づいた講演を月 1 回程度行う。	・企業一次内定率 95.3%（昨年度 97.5%）、公務員合格率 76.9%（昨年度 90.9%）と一定の成果をあげることができたが、評価基準である昨年度数値を上回ることができなかった。また企業内学園 18 名（昨年度 16 名）、専攻科 37 名（昨年度 36 名）、技術職 10 名（昨年度 12 名）と公務員技術職を含めた合格者は 71 名（昨年度 64 名）となり一定の成果をあげることができた。 ・次年度以降も学年、学科等と一丸となって、進路実現に向けて取り組んでいきたい。
8 進学部	ア 3 年後を見据えた計画的な進路指導の実現 イ 生徒一人一人の特色に合わせた進学指導により愛知総合工科高校から学びの継続による工業系リーダーの育成	・3 年間を見通した進路指導を行えるよう進路ホームルームや学年の進路行事を計画的に実施する。 ・進路検討会を通して、学年と学科間の連携を深め、生徒の進路実現の関する業務を円滑に実施する。	・進路学年集会の前には、学年の進学部員と内容の打ち合わせを行い、講話の内容については事前に学年団に確認してもらうことで、効果的な集会を行うことができた。 ・進学希望者の多様な特性に合った入試方式の選定を行うことが今後の課題と考える。 ・第3学年の進学指導については、学年会や検討会を通じて、綿密な情報交換ができた。低学年時についても、学年会などをより活用していきたい。

9 工務部	ア 工業に関する興味・関心を高める。	・各種資格・検定試験の冊子をもとに生徒の資格検定試験の取得に関心をもちさせる。 ・キャリア教育活動が積極的に取り組めるように生徒へ促し、産業に関する視野を広げる。 ・「夢志 Innovation 研究発表会」、「学校説明会」、「学科別体験入学」などを通して工業の内容を広く発信する。	・1年生の検定取得者の割合が増加し、多くの生徒が技術顕彰を取得することができた。専門性の高い資格に挑戦する生徒も増加している。 ・夢志クエストでは、1年生全員が企業や大学の講座を聞くことができ、インターンシップや校外学習に興味をもつきっかけができた。2年生のインターンシップやクラフトマンⅢなどの校外活動も積極的に取り組んでいた。 ・校内・校外イベント、ワークショップなど生徒たちとともに積極的な情報発信に努めることができた。
10 広報・ICT部	ア デジタルマーケティングの強化 イ ICT ツール活用の最適化	・学校ブランド強化の取組をさらに推進するために、ソーシャルメディアの活用を強化し、学校の魅力をよりダイナミックに伝える。 ・オンライン協働ツールを活用し、教職員と生徒の間のコミュニケーションと情報共有が一層スムーズに行えるようにする。	・フォロワー数は90日前から9.3%増加し、安定した成長を実現した。一方で写真投稿が多く、動画コンテンツやストーリーズの活用が限定的である。 ・ほとんどの生徒が通知を受け取り、既読率90%以上を達成し、迅速な情報伝達が可能になった。 ・課題提出率85%、期限内提出率75%と一定の成果を上げたが、一部の生徒が期限を守れないケースも見られる。
11 1年生	ア 基本的な生活習慣の確立 イ 学力の定着 ウ 卒業後の進路実現	・基本的な生活習慣確立の必要性について説明し、生徒に意識付けを行い、欠席・遅刻・早退の数を減らす。 ・定期考査や模試、到達度テストの結果を活用し、生徒の学習に関する指導・助言を行い学力の定着を図る。 ・卒業後の進路実現をさせるために進路指導部と連携しながら、早めの意識付けを行い、受験・就職準備をさせる。	・チーム担任制により、複数の教員から生徒に声掛けをすることで、生徒は順調に学校生活を送ることができた。 ・日頃の生徒の単元テストや小テストをもとに、学習の指導・助言を行うことができた。 ・学年進路担当者と進路指導部が密に連携を図り、進路の意識付けを行うことができた。
12 2年生	ア 基本的な学習習慣の定着と向上 イ 他者との繋がりを実感できる意識の高揚	・教科を問わず、日々の授業を大切に、学習に向かうことを習慣化させる指導を継続する。 ・学校以外の場においても学びを継続するための情報提供を、関係各所との連携の中で進めていく。 ・自己を見つめ、支えてくれる周囲の人や現在の環境に対して、自然と感謝ができるような意識を高める。	・積極的に授業に参加しようとする生徒が多くなった。このような状況が、進路決定後も続くかが課題である。 ・学科毎の取組に関しては特に積極的に参加し評価できる。しかし、家庭学習が疎かになってしまった部分は改善の余地がある。 ・周囲への気配り、心配りなど優しい一面が見られた。挨拶を含めた言語化・表現力が、今後の最大の課題であり、社会からも求められると大いに感じている。

13 3 年 生	ア 基本的生活習慣の確立	・最終学年においても、基本的生活習慣の確立が必要であることを説明し、生徒に意識付けを行う。	・生徒指導部が実施する遅刻指導を基に、生活習慣を改善させるための指導ができた。一方で、長期休業明けや、10月以降に遅刻数が増える傾向にあるので、進路にかかわる区切りごとの細かな指導も必要と思われる。
	イ 現状に満足しない学力の定着	・授業・進学補講を中心とし、予習・復習を始めとする家庭での学習習慣の確立を目指すことで、自己実現のための一助とさせる。	・特に課題提出が困難となる生徒に対して、根気強く対応をすることができた。
	ウ 卒業後の進路実現	・進路指導部と連携を図り、生徒、進路指導部員、担任、各学科と協力して進路面談の時間を設ける。	・就職指導、進学指導ともに進路指導部ならびに各学科と連携して指導を進めることができた。
14 理 工 科	ア 学びの探究	・ICTを活用して、生徒の学習状況をデータベース化する。 ・科目「実習」の教材の充実に努める。	・科目「課題研究」における研究報告書の提出や科目「実習」の課題の提出を teams により行った。生徒はタブレットの扱いやデジタルファイルの扱いの習熟度があがっている。
	イ 進路実現の探究	・大学訪問や、大学と連携することで、本校生徒に適した入試情報の収集を行う。	・校外学習では高大連携協定締結校以外の大学の協力を得て、第2学年全員が、それぞれの進路希望や興味・関心に応じた大学の研究室訪問を行うことができた。
15 機 械 系 学 科	ア 自ら考え、行動できる生徒の育成	・積極的に職員と生徒が関わりをもち、個々を尊重し自ら考え、行動する力を伸ばす指導を目指す。 ・生徒自ら考え、行動する時間を多く設定する。	・積極的に生徒とコミュニケーションをとり、個々の希望、特徴や進路などについて理解し、その実現に向けてどのような行動をすればよいのかを指導した。ほとんどの生徒が自分の第1希望への進路実現ができた。 ・授業で教員が全てを教えるのではなく、生徒自ら考え、行動する時間を意識的に多く設定した。生徒は自分の考えをまとめ、行動できるようになった。
	イ 社会人基礎力(知識・技能)の醸成	・生徒個々やグループに対して、適切な課題を設定し、問題解決に向けて取り組むことができ、それぞれの力を育む指導を目指す。	・生徒個々やグループの様子を確認し、それぞれに適切な課題を課した。課題に取り組むことにより、生徒の力を育むことができた。
16 電 気 系 学 科	ア 学習指導の充実	・基礎・基本的な知識と技術を取得させ、応用力を身に付けさせ、国家試験の第一種電気工事士や第三種電気主任技術者試験、IT パスポート、基本情報技術者試験を取得させる。	・目標とした資格を多くの生徒が取得することができた。課題としては目標の資格を設定するときに、生徒のレベルに合う資格を選択することが重要である。
	イ 進路指導の充実	・キャリア教育活動に参加させ、実践的な技術や知識を学ばし、個々の生徒に目指す進路について調べさせる。	・資格取得を通して自信と専門科目への理解が深まり、進路決定の助けになった。キャリア教育活動に参加した時も、資格の重要性の説明を受け、今後も資格取得とキャリア教育に力を入れていきたい。

17 建設科	ア 工業教育の強化 ・生きた学びの実践 ・資格取得への支援 イ 進路指導の充実	・課題研究における外部連携など、実践的な知識、技術を学ぶ機会を設けるとともに、建設業界への興味・関心を高める。 ・資格、検定試験に向けた指導体制の強化を図ること、進路実現に必要な資格取得への支援を一層充実させる。 ・工業の特色を生かした大学進学、技術系公務員や企業（技術職）への就職を支援する進路指導体制を継続的に展開する。	・科目「課題研究」やインターンシップ、現場見学など、外部機関との連携を通じて、実践的な学びにつなげるとともに、進路選択の一助とすることができた。 ・測量士に合格する生徒を輩出したものの、資格取得に向けた指導体制が十分に整っているとは言えず、教員間の連携強化が必須である。 ・就職では概ね生徒の希望進路を実現させることができた。また、進学では国公立大学に3名合格させるなど、一定の成果を上げた。
19 デザイン工学科	ア 産業界で活躍するデザイナーの育成 ・デザインの魅力を発信 ・進路指導の充実 イ 地域、企業、大学との連携	・授業、講習を通して、デザイン業界や大学の特色などの情報を提供しつつ、デザインの魅力を伝える。 ・国公立大学進学を主軸とした進路面談を充実させる。多様な補習を実施し、進路実現に取り組む。 ・地域、企業、大学と連携した制作活動を行うとともに、生徒の活動成果を積極的にPRする。	・面談を通して進路の方向性と現実的な企業、大学を希望しているかを確認しつつ、アドバイスすることができた。 ・大学を卒業し就職した本学科卒業生や芸術大学大学院生との連携を通して生徒の立場に立った情報や努力目標を提供することができた。 ・インターンシップ、地元の警察署や図書館、企業との連携制作、デザイン工学科単独説明会やデザイン工学科生徒作品展を通して、地域への貢献とデザイン工学科の魅力を発信することができた。